JARA
PERSPECTIVE
JARA広報誌

建築ヴィジュアライゼーション展2021

40周年記念

繋がる
広める
深める

Catalog of JARA2021

●特集
JARA40年のあゆみ…… 5
会員アンケート「今どきのレンダラー」…… 22

●会員作品図録 ……25

●会員名簿 ……51

●活動紹介 …… 60

● about JARA …… 63

JAPAN ARCHITECTURAL RENDERERS ASSOCIATION

図録広報誌「PERSPECTIVE」表紙一覧
1982 年以降「PERSPECTIVE」と名付け、
毎年発行しています。

ごあいさつ

レンダラーの職能の社会的認知と技能の向上を目指して発足したこの会は、会員間の交流を通じてその視野を広げ、毎年開催する作品展において各自の研鑽を発表してまいりました。

ご存じの通り昨年は、新型コロナウイルスにより世界中が混乱に包まれました。生活そのものが脅かされる中、私どもは企画中だった創立４０周年記念事業の実施を１年延期することにいたしました。発足以来、毎年実施していた作品展を中止したのは初めてのことで、言葉にできない思いで一年を過ごしましたが、2021 年になり感染対策においては一定の基準ができましたので、１年遅れとなりましたが創立４０周年記念事業として本展覧会を開催することといたしました。

４０周年をどう迎えるかについて、JARA 会員は数年にわたり向き合ってまいりました。今現在の会員が望んでいること、JARA らしい活動であることを大事に模索し考えた結果、この節目の年の展覧会は、例年の作品展の拡大版として「深める・広げる・繋がる」というテーマで構成し、その中に明確な視点をもったいくつかのコーナーを設けることといたしました。
４０年の足跡を振り返りながら、多様な表現の変遷、表現手法の変化、描き手の技能をご紹介し、建築ヴィジュアライゼーションについて深堀りいたします。また、バラエティに富んだ会員作品の描画力と表現力をご覧いただくとともに、海外作品や学生作品など、広く時空を超えて “ 建築ヴィジュアライゼーションの未来 ” へと繋ぎます。
一つ一つのコーナーは小さいものかもしれませんが、出品者にもご来場者の皆様にも深く考察いただく要素が詰め込まれています。建築関係者だけでなく、それに関連する様々な業界の方々にも広くご高覧いただけますと幸いです。

このように当協会は、誰もが職能を高められる機会を継続することで建築文化の一端を担ってまいりました。発足以来、当協会を支えてくださった先輩方のご尽力に感謝するとともに、本事業へのご支援をいただきました法人・企業の皆様、図録広報誌作成においてご協力くださいました皆様に心より御礼申し上げます。

JAPAN ARCHITECTURAL RENDERERS ASSOCIATION

日本アーキテクチュラル・レンダラーズ協会 理事長
上野 真理

建築ヴィジュアライゼーション展2021

Outline

JARAは2020年に創立40年を迎えました。40年の足跡を振り返りながら、
建築ヴィジュアライゼーション手法の変化、多様な表現の変遷、描き手の技能をご紹介します。
また、バラエティに富んだ会員作品の描画力と表現力をご覧いただくとともに、
海外作品や学生作品など、時空を超えて広く、
そして“建築ヴィジュアライゼーションの未来”へと繋ぎます。

図録広報誌の配布（無料）もあります。

東京展

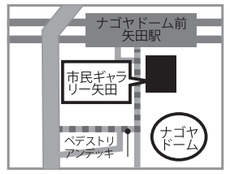
2021.9.19 (日) —— 9.27 (月)

開館時間 11:00 - 19:00

建築会館ギャラリー

東京都港区芝5-26-20 TEL.03-3456-2016

JR「田町駅」西口・都営地下鉄「三田駅」から徒歩３分



名古屋展

2021.10.12 (火) —— 10.17 (日)

開館時間 9:30 - 19:00

初日は12:00から／最終日は17:00まで

名古屋市民ギャラリー矢田

名古屋市東区大幸南一丁目1番10号 カルポート東 3F

TEL:052-719-0430

地下鉄名城線「ナゴヤドーム前矢田駅」徒歩5分

大阪展

2021.11.5 (金) —— 11.9 (火)

開館時間 10:00 - 18:00

初日は13:00から／最終日は16:00まで

大阪デザイン振興プラザ（デザインショーケース）

大阪市住之江区南港北2-1-10 ATCビルITM棟10F

TEL.06-6615-5510

ニュートラム「トレードセンター前駅」直結

協賛

株式会社日本HP

大成建設株式会社

株式会社梓設計

株式会社Too

シンテグレート合同会社

株式会社ヴィック

株式会社アルモ設計

鹿島建設株式会社

清水建設株式会社

株式会社STUDIO55

株式会社竹中工務店

一般社団法人 日本パーステック協会
パース検定・パース教育

協力

The American Society of Architectural Illustrators (ASAI)

株式会社アルファ企画

キンコーズ・ジャパン株式会社

特集・対談

JARA 40年のあゆみ

特集◉
対談

40th Anniversary Special Dialogue

JARA 40年のあゆみ

JARA 創立40周年にあたり、その歩みを紐解いてみました。1980 年に建築パースを職能とする人が集まって立ち上げたこの団体が、40年で何を思考し、何をしてきたのか、何が変わってきたのか…。その間に JARA の活動にご尽力された方々に、「JARA 創立そして」「CG への取り組みについて」「建築を学び描くことについて」「JARA 大賞について」、そして最後に最近の 10 年という切り口でお話をしていただきました。

ヴィジュアライゼーションに関するテクノロジーの進化はとどまることなく続いています。職能の分野や境界線が消えつつある今、40年のあゆみを振り返り、現状を見つめ直し、建築ヴィジュアライゼーションの未来を展望できればと思います。

みやざき・たけひこ
アトリエ・アルム

1953 年生まれ　1986 年 JARA 入会
JARA10代目理事長（2011～2018 年度）
現在　関東支部会員

Takehiko Miyazaki

うえの・まり
株式会社アルモ設計
デジタルソリューション部

1968 年生まれ　2001 年 JARA 入会
JARA11代目理事長（2019 年度～）
現在　関東支部会員

Mari Ueno

宮崎 岳彦 × 上野 真理

宮崎：　JARA４０年を、歴代理事長の４人の方々にそれぞれの切り口で執筆いただきました。現理事長である上野さんと私、直近10年を見てきた理事長という立場で振り返りましょうか。

上野：　振り返るというと懐古主義のように思われがちですが、それぞれがまさに当時の最先端だったんだと知ると、とても興味深く感じます。

宮崎：　ある程度仕事ができるようになってくると、その職能の背景を知りたくなるもので、昔はどうだったのかと聞いてくる人は多いです。私だって創立時から会員だったわけではないので楽しみです。また、こうして紙面に残しておくことは大変意味のあることだと思います。今では当時のことを知る人も少なくなりましたし、こうした企画はこの職能の歴史を残す意味で貴重です。

上野：　パースの歴史をこんな風に記録した教科書はないでしょうから、今のうちに聞いておかねば！　おおよそ時代順の切り口になっているので、さっそく読んでまいりましょう！

1980～

- **1980** JARA創立
- **1981** 一般公開セミナー「パースペクティヴ・ドローイング技術講座」
- **1982** 「建築パース'82 展」以後毎年開催
- **1986** 海外交流開始
- **1990** 創立10周年『JARA大賞』公募展
- **1993** 「緑化革命」グリーンプライズコンペ
- **1996** ＩＰＦ国際建築パースフォーラム
- **2000** 創立 20 周年『JARA大賞』公募展
- **2000** ホームページ開設
- 総会 支部会 一泊旅行
- **2005** 創立 25 周年『JARA大賞』公募展
- **2010** 創立 30 周年『JARA 大賞』公募展
- **2011** 国際建築イラストレーション展『Visualizing Architectural Design Exhibition』（UIA 2011 東京大会関連イベント）
- WEB ギャラリー
- **2012** 図録広報誌 A4 サイズに変更
- **2012** 作品展の名称を「JARA20xx」に変更
- **2013** 特別展示・特別企画開始
- 作品展併催 セミナー トークイベント
- **2014** JARAcafe JARAbar 開始
- **2016** 勉強会 VAV（表現のバリエーション）
- **2020** 新型コロナウイルスで初めて作品展中止
- **2021** 創立 40 周年展覧会 作品展の名称を「JARA 建築ヴィジュアライゼーション 20xx」に変更

2021～

JARA創立そして

刈谷 拓爾
かりや・たくじ

Riya Art Associates 代表
1941 年生まれ　1980 年 JARA 入会
JARA7 代目理事長（2003 ～2005 年度）
元 ASAI 会員
現在　関西支部特別会員
日本美術会会員

Takuji Kariya

はじめに

1980 年 12 月 8 日、ジョン・レノンが凶弾に斃れ、世界に衝撃が走った。あれから 40 年、まさに光陰矢の如し。

職能の確立

建築完成予想図（パース）は、元来、建築家自身のデザイン検討の為のスタディパースや、最終確認の為に描く設計図書の一部であった。また、パースを描くことは設計業務の区切りとして、建築家の楽しみの一つでもあった。

1950 年代半ばから、パースは施主に対する営業用のプレゼンテーションの手段として活用されるようになった。建築家の手から分業化され、建築設計事務所やゼネコン設計部に、新しくパースの部門が設置されるようになる。そして、パースの需要も年ごとに増えていき、1963 年、パース事務所「デザインコーナー・タナ」が東京に設立された。これを期に各地に次々とパース事務所が開設されていった。

また、出版社により「パース作品集」が刊行され、誰がどのような作品を描くかが少しずつ知れ渡っていくとともに、各作家間の横の繋がりも広まっていった。

優れた感性豊かなパースは、建築デザインにより一層の輝きを与え、また時には、建築家にデザインの再考を促すこともあり、建築家もパースの果たす役割を認め、互いの信頼関係は深まっていくことになる。このようにして、パースは建築設計業務の一分野としての地歩を固めていった。

各自が作家としての自覚やプライドを育んでいく中で、自分たちの職能を確立し、世の中にこの職能を認知させ、社会的地位向上を目指して協会を設立しようという機運が高まっていった。

1980年前後に出版の「パース作品集」
（グラフィック社提供）

協会の創立

「今こそ協会を設立しよう！」と初代理事長を務められた福永文昭氏の呼びかけで、仲間の掘り起こしや会則案の作成等の下準備が始まった。

株式会社竹中工務店の光藤俊夫氏に会長就任を承諾していただき、協会創立に当たっての難題の一つが解決し、創立への動きは一気に加速した。

2 年近い準備期間を経て、1980 年 7 月 19 日、東京九段会館で第一回の総会が開催され、この日を創立日と定めた。

1990 年 JARA 大賞表彰式での
ASAI メンバーと光藤会長

1986 年 ASAP（現ASAI）設立記事（広報誌 PERSPECTIVE より）
1990 年 韓国 KOPR（後の KAPA）安容植会長（広報誌 PERSPECTIVE より）

JARAは多くの建築関係者の祝福と励ましを受けて歩み始めた。「個性の強い一匹狼たちが無事やっていけるのか」と危惧する声もあったが、こうして 40 年の歴史を積み上げてきた。これは多くの方々の職能に対する熱い思いと粘り強い努力の結果である。

国際交流

JARA創立は、世界のレンダラーの動きに少なからず影響を与え、1987 年にアメリカ、1989 年に韓国で、それぞれ協会が設立された。以降両国の総会には、当協会から会長をはじめ多数の会員が参加し、また、当協会の総会にも両国から多くの会員を迎えた。

その後、カナダ、オーストラリア、ドイツ、中国、へと友好の輪は広がっていった。

おわりに

遠い記憶を辿りながら、創立当時のことを綴ってみました。

協会創立前後のあの活気に溢れていた日々を思い返すと、『パースはアートか？』など熱く語り合った一人一人の顔が懐かしく浮かんできます。特に光藤会長のウィットに富んだお話や、豊かで包容力のあるお人柄はすべての会員にとってかけがえのない存在でした。

人類は今、『新型コロナウイルス危機』の渦中にあります。健康に配慮しつつ、感性豊かな作品を目指して、充実した日々を送られんことを。

1980 年 第一回総会（会報誌 AR より））

1981 年 光藤会長より「羽撃け！レンダラー」（会報誌 AR より））

40th Anniversary Special Dialogue　　*TakehikoMiyazaki ＊ UenoMari*

宮崎：　まず創立について、当時から現在まで会員である 7 代目理事長の刈谷氏に執筆いただきました。創立総会に私はオブザーバーとして参加していたのです。27 歳の時です。この仕事に就いて 1 年少々の若造でした。入会資格も無く、雲の上の方々の中で小さくなっていましたよ。当時は皆さん手描きで職人的でしたし、「パース作品集」の出版も盛んで、それらの中から自分の好きな作品を探しては真似をしたものです。“憧れ”もありましたしね。その後 JARA に入会してそんな憧れの方と直に話ができたことは、以後の自分にとって大変益になりました。当時、こうした職能団体の最大の意義は“会員間のコミュニケーション”だった気がします。ネットなどない時代ですから。先輩方の描く様子を見る機会があると「お～～っ！」と唸ったものです。

上野：　私は JARA に入るまで、会社以外のパース業界のことをほとんど知りませんでしたし、パースを描く人をレンダラーと呼ぶことも知りませんでした。作品展や支部会に参加するうちに少しずつ先輩方からお話を聞くようになったんですが、今はシロウトが WEB でいきなり業界のスゴイ人に出会える時代。例えるなら、JARA 創立から輪が広がっていく様子は、苦労して階段を上っていく感じですが、今はドローンで好きなところに飛んで行けるというイメージですね。

宮崎：　確かにそんなイメージありますね。当時はパースを制作する部署を企業内に持つ会社はそう多くはなかったのです。大手の設計事務所・ゼネコンくらいだったかもしれません。創立時のメンバーはフリーランス 7：会社員 3 くらいだったでしょうか。そんな先輩方の当時の熱量は相当なものだったと記憶してます。

上野：　しかし個性の強い人が多い業界ですので、よくまとまったなと思います。作品展を開催することが共通の目標にあったからでしょうか。パースの作品会を毎年開催することができるのも、JARA 発足時から作品展の土台を築いてくれた先輩方のおかげだと思います。

宮崎：　全くそのとおりだと思います。どうしたらこの職能を高められるのか…私が当時勤めていたパース制作事務所のボスお二人が創立時からの会員でしたから、熱い話をよく聞かされました。当時のことで驚いたことをｃ思い出しました。先輩方と街を歩いていた時のことですが、すごい観察眼を持っているのですね。ただボーっと歩いているのではなく、常にいろんなものに目をやり吸収しているんです。この職能に大事なことだと気付かされました。加えて建築家との関係性も、この時代の方が今より強かったように感じます。創立総会には建築家の芦原義信氏、山下和正氏他も来賓として出席くださったのでした。

CGへの取り組みについて

門脇 信夫
かどわき・のぶお

1942 年生まれ　1980 年 JARA 入会
JARA3 代目理事長 (1984 ～ 1988 年度)
元関東支部会員

Nobuo Kadowaki

レンダラーと CAD の出会い

1980 年の協会設立当初の世間の CG 事情と協会との関わりを語ってほしいという、協会執行部の要請で年寄りの憶えている話をしましょう。

1980 年代にボストンをワイヤーフレームで表現し自由に市街を飛び廻る短いムービーを見た時、偉く感動したね。これからの建築プレゼンはこれだよーと、ひとり盛り上がっていた。

ま、大変なマシンで作っていたんだろうが、その頃日本ではパーソナルコンピューター、パソコンという言葉が出てきて、一般でも手にすることができるようになった。まだアップルには縁がなく、富士通が講習会とかを開いていた「FM-7 (正式名称：FUJITSU MICRO 7)」が身近だった。協会員も何人か講習会に参加して触らせてもらったけど、カタカナしか打てなくてね。まだ使い物にならないマシンにイライラしたのか、捨て台詞をモニターにカタカナで毒づいた不埒なやつもいたなぁ (笑)。

私はこれにパースとの関連性を求めて、FM-7 で図を描く研究をしている人に辿りついた。まだアップルもパソコンではそのレベルまで行ってなかったんだよね。

その研究者と透視図が描けるか、酒の瓶を抱えながら徹夜で話し合った。

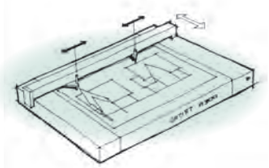
とにかくやってみようと言うことで、マシン FM-7 を 1 台と T 定規とデカい三角定規で始めた、パースの型取りをね。どうやったかと言うと、平面図を製図板にセットして T 定規には横にスケールを書き込み、これを X 軸 - 横とし、三角定規にも 90 度部分に縦にスケールを書き込み Y 軸 - 縦とした。

X と Y の交点と高さは Z として図面の数値を出す。初めはその場でキーボードのテンキーで XYZ の数値を入力していたが、紙に票を作り筆記してからまとめて入力したほうが順序の間違いもなく早いと気付くんだね。

何百のデータを取り終わり、グリーン CRT の画面に白い点、XY プロッターの不思議な動きで出力すると、真っ白い紙にすりごまを撒いたような無数の点！　この点同士を直線でつないで立体を出す。至難の技だよ (笑)。

はじめは陰線も繋がないと立体が把握できなかったが、慣れるうちに陰線を無視して描ける様になった。

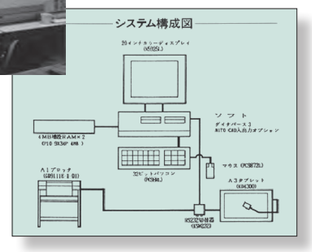
そんなチマチマしたことをやっているうちに、FM マシンの進歩とともに英文の CAD ソフトが出てきて、入力方法もデジタイザーに変わり、CAD ソフト (AutoCAD) もフロッピーディスクで使い物なるには程遠い内容だった記憶がある。これは何となく絵を描く雰囲気では無いことを体で感じて、CAD から身を遠ざけるようにしていた。



1988 年 catistA300_ist

1983 年 作品展における
「PC で透視図を描く」コーナー

1990 年頃 CG 黎明期
門脇氏事務所の PC 機材



1990 年 CG 黎明期
システム構成図

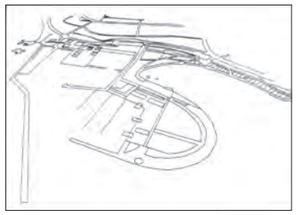
お絵描きソフト登場

私にとって画期的だったのが MAC が身近になったのと、お絵描きソフト Photoshop 2.0 (英語版) との出会い、もうこれは面白くてのめり込んだね。CAD ソフトでなんか違う……との気持ちがこれで払拭された気分だったなぁ。これでプレゼンを作ろうと、左手は腰に右手は天に向かってマウスを突き上げていた、45 才 (大笑)。

この頃は miniCAD なんかで陰線処理もできて、ラインだけの図をコピー用紙にプリントアウトし、それを水彩紙にコピーをして彩色したり、実はこれの方が早いが、もう一つ、取り込んだ線描に Photoshop 2.4 を使ってマシンで彩色することもやっていた……手間がかかり時間も食うが、これの方が面白かったんだね。

そのうち、mini CAD+STRATA +Photoshop という組み合わせで作品を作りだした。

今はすっかりパースの世界とも離れてしまったので、みなさんがどの様な制作過程を選んでいるか知り得ませんが、大きな進歩を遂げた CAD・3DCG に加え手描きなども健在なんでしょうね。会員の皆さんは弛まぬ研鑽を重ね業界の発展を続けてください。



1988 年 門脇信夫
「マリーナ計画案」
(左上)CG による下図
(左下) 手描きを加えた線画
(下) 着彩版 (※実物はカラー作品)

同様の手順で完成した別案件作品 1988 年 門脇信夫「都市計画 - 鳥瞰」

1996 年 IPF CG セミナー
における門脇講師

40th Anniversary Special Dialogue　TakehikoMiyazaki ＊ UenoMari

上野：　40 年の間に、表現手法はずいぶん変わったと思います。CG の黎明期に時代の先取りをされた門脇さんに当時を振り返っていただきました。

宮崎：　道具の主流は変わりましたね。JARA 最初の 10 年はほぼ手描きの時代です。自ずと個性が出て、どなたの作品かは、見ればほぼわかりました。絵の具 (グァッシュ & 透明水彩など) による着彩が主流でしたが、同時代にペン＆インクを主とする描き手の方もいらっしゃいました。そんな時代に重なって CG の出現があったのですね。過去の広報誌を見ても CG 関連の記事が散見されるようになったのは 80 年代中頃です。会員の中からもいち早く CG 制作を導入される方も何名かおられましたが、何しろ機材が高額な時代ですから、そうそう手が出せる時代でも無かったわけです。

上野：　想像以上に早くから CG に取り組んだ会員も多いのですね。「このテクノロジーで何かできないか」と徹夜で話し合ったという開拓精神は、xR や点群データが出始めた時にもどこかであったかもしれません。2000 年くらいになると、パソコンと CG ソフトの普及合戦のように、CG セミナーや交流会が多数ありましたね。今のような SNS はないので、メールや掲示板を駆使して TIPS を公開したりとか、当時は随分盛り上がりましたね。

宮崎：　景気が悪い時代だからこそだったのでしょう。少し時代遡って…、門脇さんの文にもあるように、当時パース描きにとって Photoshop の出現は大きかったです。初期コンピュータの使い道は下図を作るのが大半でした。レンダリングまでするにはマシンがまだまだ貧弱でしたから。そんな時代の Photoshop、手で絵が描ける人達にとって、感覚的に CG への入り口として最適だったのでしょう。インストールするのにフロッピーディスクを何枚も差し込む時代です。こんな時代 CG をいち早く導入した門脇さんが、協会員に対して惜しげも無く最新の技術・知識を披露してリードしたのです。IT に遅れ気味だった人達にとってありがたいことでした。これも JARA 在籍の大きな意味となりました。

上野：　当時の CG は、新しい表現方法としての期待感以上に、流れが変わるぞという危機感で CG に転向した人も多かったのではないかと思います。過渡期には、CG と手描きをミックスしたハイブリッドパースも生まれましたね。時は経ち、今やリアルタイムレンダリングが当たり前、CG 専門の人でなくても高品質な表現ができるような時代になりました。しかし、それでも次から次へと新しいテクノロジーを元にソフトやデバイス等が発表され、するとまた新しい表現ができないかと人は模索、その連続…激動の時代ですね。

建築を学び描くことについて

村井 謙介
むらい・けんすけ
謙スタジオ・デザイン事務所
総合建築設計センター所長
1942 年生まれ　1981 年 JARA 入会
JARA 5代目理事長 (1995 ～ 1998 年度)
現在　関東支部特別会員
福祉施設の企画設計監理
合気道7段
Kensuke Murai

思考の一覧

私が建築を学ぶ途上で出会ったのが、現代構造研究所（現研 *）の高橋靖生氏です。建築を大学で学び、大手建築会社の設計部に所属していた時、日常業務のかたわら、当時盛んだったコンペや日常のプレゼンテーションに参加していました。そこでは完成予想図としてパースが用いられており、設計部の中で何人かが直接パースを描いていました。日常業務はほとんどが特定のパース作成事務所に外注されていました。

大学でパースを学ぶ機会がなかったので密かに現研パース教室に通うようになりました。学んだのは完成予想図の描き方ではなく、基本的な建築のとらえ方のトレーニングです。簡略な建築図法のほか、平面図から直接立体を描き出したり、古典絵画の水彩画コピーを分析された手順で描いたり、鉛筆や筆を使いフリーハンドで対象をよく見て描き出すなどという、短時間のハードトレーニングでした。

しばらくパース教室に通ううち、教室の課題をつくったり、教える助手をしたりしている中で、建築設計以前に現在の社会が何を望んでいるのか、何を表現したいのかと自分に問いかけ、自分を見つめなおす機会が多くなり、このままずっとぬるま湯につかっていていいのかと思い至って、思い切って退職し、新しい環境を選びこの世界に飛び込みました。

＊現代構造研究所：建築設計事務所（代表：高橋靖生）
1970 年代当時まだ少なかったパース教育の先駆けでもある。
（著書：「建築透視図法」1975 年鳳山社　他）

手のひらサイズ

「手のひらサイズ」のスケッチ

自分の目で見、自分の手で描くことによって、自分の考えを深めていくことの価値を建築家の吉阪隆正氏に学びました。20代の頃ヨーロッパ建築視察団に参加し、500人余の建築関係者が参加するツアーの団長として吉阪先生がおられました。大型バスでイタリアから北上する中、バスが休憩のため停車するわずかの時間に小さなスケッチブックを開き印象に残る景色をスケッチする姿を見かけました。後に何かの講演の中で、「良いものを見たりひらめいたりすることがあるとすぐにスケッチすることにしている」と伺ったことがあり、その時手のひらサイズの紙に描くのがよいこと、手のひらサイズは一目で把握できメモしやすいこと，紙と筆記具は常時身近に持っているということ、大がかりな道具だと景色もアイデアも瞬時に消え去ってしまうと言う教えでした。当然フリーハンドです。最近の建築教育ではコンピュータで学び表現しますが。私も実施設計業務では CAD を活用しますが、最初の構想の時はフリーハンドです。

吉阪隆正氏 _ 元早稲田大学理工学部長、元日本建築学会会長

1993 年 緑化革命グリーンプライズコンペ審査風景

1993 年 緑化革命グリーンプライズコンペ応募作品集（表紙：金賞作品）

「緑化革命」グリーンプライズコンペ

地球温暖化が叫ばれ大都会の気温も年々高まり、建物の屋上を緑化する法律もでき上がり、都市緑化機運が盛り上がりました。建物の外壁も緑化することによって省エネルギーの効果が得られるといわれ、各企業もこぞって素材を開発し、大規模開発計画では緑化なしでは成り立たなくなっていました。当時、都市緑化機構の協力を得て緑化コンペを JARA で取り上げることとしました。“「緑化革命」グリーンプライズコンペ ” です。図面もなければ，事業主もいない、あるのは協会員のアイデアあるのみ。短期間で内容の掘り下げまでには至りませんでしたが、建築家やクライアントや建築教育現場の先生方とも対等に立てる良い機会になったと思っています。

ミクロチェックの会

「ミクロチェックの会」

現研にパースを学びに来た方の中では建築以外の、芸大卒業生の油絵や彫刻、陶芸、分野の専門家の中で建築分野に参入する方々と交流する機会がありました。その中で私と同世代の方々の作品に触れたり話を聞いたりする機会がありました。アートの分野で共通することですが、その専門の分野に真剣に取組み掘り進むうち、大きな世界観が生まれ視野の広い方々が多く存在することに気が付きます。その方たちを講師に招き話を伺う会が「ミクロチェックの会」です。私の興味のある分野の方々と交流する機会がどんどん膨らみ、来ていただいた講師の友人や知人の紹介でその輪がどんどん膨らんでいきました。現研を離れても私の事務所で業務後に月 1 回続け 20 年ぐらい続きました。そこに JARA 会員にも声をかけ参加してもらうことで、レンダラーの職能の幅を伸ばすことに努めました。そうしたつながりの中から、私の設計した老人ホームの中に大理石モザイクの床や壁面に作品を作ってもらったり、ステンドグラスの窓、アイアンワークの風見鶏の造形を屋根に載せたり、バルコニーの手すりに鉄の鋳物を採用したり、かなり楽しい空間を造りあげることができました。又、水彩画を実演してもらい、筆使い、絵具と水のバラエティー、紙の選び方等を学ぶこともできました。建築分野では、才能ある若手の建築家を呼び、作品に込める思いや考え方を語っていただきました。

また JARA では、ヴィジョン研究会を立ち上げ、先輩レンダラーのアトリエ訪問、新進の建築評論家の講演会、前述のグリーンプライズコンペの企画立案･実施で、都市緑化機構の方々や、造園設計の専門家、建築家と交流することができました。コンピュータではあらゆる情報がすぐ手にはいりますが、自分の目で見て体感することが大切と最近特に感じています。

1992 年 ヴィジョン研究会によるテーマ

40th Anniversary Special Dialogue　TakehikoMiyazaki ＊ UenoMari

宮崎：　コンピューターと云う優れたツールを、設計者もパース制作者も持つようになり、パース制作自体が特殊技能である時代ではなくなりましたね。でもこれはその前の時代から危惧されていたことなんです。「我々は描いているだけで良いのか?」よくそんな議論が為されていました。会員の中には設計出身であったり、実際設計業を主体としてパース制作もしていた方が何名かおられましたし、今でもそうです。要は「クライアントの言われるがままに描いている」では、将来が無かろう、ってことですね。また、描いている対象（建築や環境）への理解無しにこの仕事はなり立たないだろう、ってことですね。90年代初頭、設計業の会員村井さんがその辺のことを大きく主張され、シンポジウムや勉強会を設計他いろいろな部門の方々を呼んで設けてくださいました。当時どのようなお考えで、そうした提唱をされていたのか、執筆いただきました。

上野：　2020年の新型コロナウイルスを期にオンラインセミナーが一般化し、それもゲームや映画、プログラミングなど、業界の垣根を超えたものが増えました。もはやＣＧパース制作は特殊技能ではなく、若い設計者は当然のように CG 制作までやってしまう時代なのです。しかし、様々な理由で我々専門家にパースを依頼しています。そんな状況で大事なことの一つに「建築への理解」があります。図面を見たら、設計者がどういう空間を作り、どういう人の流れを作りたいのかがわかるようなベースが必要です。これが業界の違う CG 制作者ではなかなかできないことかと思います。

宮崎：　そうですね。私たちの職能を磨くにあたって必要なのは、多岐に渡るモノへ常に興味を持つことだと思うんです。「観察力」を磨くのもそれと同等のことでしょう。もちろん表現する対象である建築・環境については言うまでもなくです。昔も今も優れた表現者は、簡単に言うと…「モノ知り」だなぁと思ってます。

上野：　JARA では作品展に合わせてギャラリートークやセミナーを行うことが多いのですが、ここ数年、異分野の方を招いて行っています。それも学びの精神です。このような企画は支部会で意見を出し合って決めますが、実はアイディアは出

ても皆さん多忙で、実施するのは大変なんですよ。村井さんの記事を読み、なんという熱意と行動力だと驚きます。

宮崎：　現在 JARA で行われているイベントは、村井さんが提唱されていた事柄が面々と受け継がれているようでとても良いことだと思っています。表現する対象のこと、設計者の意図を理解するには人間の営みも含め建築まるごとを少しでも学ぶ必要があると思います。浅く広くで良いとは思います。

JARA大賞について

坂井田 優実
さかいだ・ゆみ

有限会社エルファ・アーキィテクト
取締役デザイナー
1959 年生まれ　1983 年 JARA 入会
JARA 9 代目理事長（2007 ～ 2010 年度）
現在　中部支部会員

Yumi Sakaida

虚往実帰

若き日の弘法大師空海が唐の時代の中国で密教の全てを授かった恵果和尚の遷化に際し執筆した碑文の中に、「虚往実帰（きょおうじっき）」という言葉があります。虚しく往きて満ちて帰る。行きは虚しい気持であったが、帰りは満ち満ちているという意味ですが、 JARAの作品展は 40 年間いつもこの仕事を志す者にとってはまさしく虚往実帰。圧巻の作品に打ちのめされつつも、感性を刺激され様々な学びを得て帰っていったことでしょう。

JARA 創立３０周年記念事業

サブプライム問題、リーマン・ショックに端を発した世界金融危機真っただ中の 2010 年。 JARA創立３０周年記念事業執行部は、こんな世相においても高い理想と希望を示すこと、後進の育成こそが我々協会の使命であるとの決意を持ち、「国際コンペティション JARA大賞『美術館博物館建築を描く』」を催行いたしました。

然しながら振り返れば、理事長就任時における事業資金の繰越はほぼゼロ。企業協賛金も多くを見込めない時節柄、従来型の高額賞金を目玉とするコンペティションは困難なため、賞金以外の価値を大きな魅力としなくてはなりませんでした。思案の中、ふと学生時代の友人の言葉を思い出しました。「学生コンペって、実社会においての自分の実力が分からないし、選評も上位入賞ほんの数点だけで何だか味気ないね」と。もし、プロも学生も同じ土俵で審査されるなら…　もし、日本を代表する建築家勢からなる審査員より、入選者全員にそれぞれ講評を貰えるなら、如何に将来への励みになることか…プランはどんどんと膨らんでいきました。

素晴らしき人たち

2017 年 半澤先生と坂井田氏

ＪＡＲＡの顧問的役割をご厚意で担って下さっている建築家の半澤重信先生には、１０周年、２０周年、２５周年の各JARA 大賞の課題制作図書として、公益財団法人文化財建造物保存技術協会より門外不出の文化財建築設計図を一時借用（用途厳守）するにあたってもご尽力いただいております。　そんな半澤先生の人脈の凄さに改めて敬服したのは、この企画の相談に乗っていただいた時でした。

「全入賞者はもとより入選者に対しても選評を賜りたい、今回は選評そのものを記念すべき賞品としたいのです」と希望を述べ、多数の著名な審査員候補者をご紹介いただきました。中でも菊竹清訓先生は「菊竹スクール」と呼ばれる程、世に多くの著名建築家を巣立たせておられた方。しかし、民間の審査員など引き受けた前例がなく、そのうえ「無償ボランティアで」などと、お願いに伺った時には恐れ多くて生きた心地がしませんでした。実際、引く手あまたの菊竹先生。安直にはご承諾下さらなかったものの、幾度か通ううち、奥様のスミス睦子様のお口添えで遂にお引き受けいただけることとなり、さらには、伊東豊雄氏、隈研吾氏、内藤廣氏からもご承諾を頂け、感激いたしました。

また、 JARA元理事長・刈谷拓爾氏のご紹介で、出江寛先生に基調講演および審査委員長を、日建設計・山田雅明氏のご紹介で、元 JIA 会長の小倉善明氏、AAJ 会長の中井進氏に審査員を依頼いたしました。名古屋大学・清水裕之教授、名古屋造形大学・丹羽勝美教授にもご協力を仰ぎました。

これら素晴らしき人たちの結集により、至高の記念事業と相成りましたこと、この度の執行部および会員の皆様、協賛企業各社、ご協力下さったすべての皆様の利他の精神に心より敬意を表します。

時は巡り移ろいゆくも、その時代の JARA 会員の誰もが共に感性を育み、満ち満ちた志で躍進されることを願ってやみません。

JARA 大賞広報
上段左から
（10 周年 /20 周年
下段左から
（25 周年 /30 周年）

上段左から
2010 年 ３０周年記念講演
出江寛氏
2010 年 ３０周年パーティにて審査員総評
下段
2010 年 ３０周年「JARA 大賞」審査風景

後　援

文化庁
公益財団法人 文化財建造物保存技術協会
社団法人 日本建築家協会
社団法人 日本建築学会
社団法人 日本建築士会連合会
社団法人 日本建築協会
社団法人 日本建築美術工芸協会

審　査　員（50音順　敬称略）

出江 寛	【審査委員長】 JIA 社団法人日本建築家協会会長 出江建築事務所株式会社
伊東 豊雄	伊東豊雄建築設計事務所
小倉 善明	株式会社日建設計　顧問　　元ＪＩＡ会長 ＵＩＡ 2011 年東京大会日本準備委員会（JOB）会長
菊竹 清訓	建築家 / 工学博士 菊竹清訓建築設計事務所 社団法人日本建築士会連合会名誉会長
隈 研吾	隈研吾建築都市設計事務所
清水 裕之	名古屋大学大学院環境学研究科教授
内藤 廣	内藤廣建築設計事務所
中井 進	ＡＡＪ社団法人日本建築協会会長 日建設計副社長
丹羽 勝美	名古屋造形大学大学院教授 株式会社丹羽勝美建築設計事務所
半澤 重信	建築家 半澤重信研究室 代表
光藤 俊夫	JARA日本アーキテクチュラル・レンダラーズ協会会長 昭和女子大学大学院名誉教授

2010 年 JARA ３０周年記念事業「JARA 大賞公募展」後援・審査員
（所属・役職は 2010 年当時）

中央下：光藤会長
上段左から
宮崎氏・坂井田氏・上野氏
（2012 年作品展にて）

40th Anniversary Special Dialogue　　*TakehikoMiyazaki ＊ UenoMari*

上 野：　2010 年に「JARA30 周年記念 JARA 大賞」がありました。これは当時実行委員長であり理事長だった坂井田さんの思いと実行力が無ければ成しえなかったと思います。

宮崎：　JARA ではこの３０周年に至る前に、１０周年、２０周年、２５周年時と記念事業が行われ、それぞれに「JARA 大賞」が設けられました。これらすべてに関与して来た私としては、30 周年に「え！？またやるの！？」が正直な気持ちでした。（笑）まぁ、それくらい大変な事業と認識していたからなのですが。最初は尻込みしていましたが、坂井田理事長の熱に引きずられて、結果素晴らしいイベントになりましたね。今後このような一般コンペを実施できるかわかりませんが、形が変わっても何らかの方法で協会から社会への提唱は必要でしょう。

上野：　４０周年では JARA 大賞は企画できませんでしたが、「通常の作品展とは違った、テーマをもって挑む」公募展は、参加する側も良いですが、企画側ならではの経験ができるのも良い点です。私は３０周年の時に作品展担当理事でしたので、審査用の作品を伊東事務所や隈事務所、内藤事務所にお届けにあがり、運よく先生方とお話できたこともありました。審査会場で高名な建築家の先生方が勢ぞろいして審査してくださる様子を間近に拝見できました。

授賞式後に菊竹先生が坂井田理事長に「このような尽力の意味は必ず後になってわかってもらえる」というようなことを隣で聞くことができ、涙が出ました。

宮崎：　なるほど…。思い出しますね。…１０周年での宮脇檀先生他、２５周年での林昌二先生他、３０周年では出江寛先生他と沢山の有名建築家の先生方に審査をお願いしました。特に 2000 年付近以降私たち職能と建築家の関係はそれ以前に比べて希薄になっていた気がしますので、このような機会はとても意義深いものがあったと思っています。 それもこれらすべてに半澤重信先生が力を貸してくださったお陰なのですが。実を言えば、会内では「既存建築物を描くのは職能の本分では無い」と言う意見もあり、「実存しない、完成予想図を描くことこそが…」と議論になりました。一流の建築家による一流の建築を描き手の感性を加えて表現すると言う機会は、すべての職能者が日頃から持てるものではありません。ほんとうに素晴らしい機会であったと思います。

上野：　JARA 大賞公募展に参加した方が、後日多数入会しました。やはり、JARA 大賞という公募展で JARA の存在を知ってもらい、著名な建築家により評価していただいたことは大きかったのだと思います。

40th Anniversary Special Dialogue

TakehikoMiyazaki ＊ UenoMari

JARAの運営について

上野： 2010 年まで振り返ってみましたが、話足りないことがたくさんありますね。少し目線を変えて、JARA の運営についても触れておきたいと思います。私は 2005 年に初めて理事になったんですが、このころは理事全員が Excel や Word を使えるわけではなかったので、今思えば書類の共有や保存ができていませんでしたね。そのうち、当時中部理事だった竹中工務店の脇田さんがいろいろ書類を残してくださるようになりました。2009 年頃からは宮崎さんと作品展や広報や事務局のデータを共有するようになり、サーバーにも残すようにしたので、資料はかなり残っています。４０周年事業ではそんな資料が活かせてよかったです。

宮崎： ３０周年の準備の時、持ってるデータをよこせとうるさかったよね（笑）。名簿など、仕事じゃ使わないエクセルを使って必死で整理させられた。それと、Mac と Windows の問題はいまだにあって、たまに情報共有で困ることがあるよね。いつも合わせてるけど…（笑）。

上野： こき使ってすみませんでした（笑）。それにしても資料を整理していて思うのは、設営についてなど、実はデータには残らないノウハウを会員の皆さんが持っているということです。作品展では、事務局からの搬入や設営、機材や業者の手配、他支部との連携など、各支部の皆さんが臨機応変に立ち振る舞ってくれていて、私はいつもそれに頼り切っています。設営は知識と知恵の蓄積がないと、今のような短時間の設営はありえないでしょうね。

宮崎： そう、展示会場の設営は経験がものを言うところでしょう。技術的なこともさることながら全体を見通せる“眼”が必要ですね。器用な方が会員の中にいますから大変助かります。とにかく現場での様々な作業は「独りではできないことを、みんなで…」の最たるものです。JARA の運営は多数の会員の協力によって成り立っていると、搬出後に痛感しますね。

作品展企画会議

作品展会場設営風景

30周年以降の活動について

上野： それでは 2010 年以降の活動について振り返ってみましょう。東京展は 2009 年まで伊東屋ギャラリー（銀座）で開催していましたが、2010 年は前述の 30 周年事業『JARA 大賞』の展覧会と受賞式イベントを建築会館（三田）で開催し、翌年 2011 年は国際建築イラストレーション展『Visualizing Architectural Design Exhibition（VAD）』を POLA MUSEUM ANNEX（銀座）で開催しました。これは UIA 東京大会の関連イベントという位置づけで、アメリカの建築イラストレーション協会（ASAI）と協力して企画したものですが、とにかくこの 2 年は多忙でしたね。大阪や名古屋も、都度会場探しで大変だったと思います。

宮崎： 2010 年から 2011 年は JARA にとって怒涛の 2 年間でした。2011 年の震災の時も、企画を進めなければなりませんでしたので、私は一気に白髪頭になりました。大変ではありましたが意義深いイベントとなりました。また、このような事業は４０年の歴史を歩んできた JARA でないと、今後もできないのではと思っています。コンペティションの開催可否は別として、やはり JARA から社会に向けた発信は何らかの形で、節目節目においては大きくすべきなのかもしれません。

上野： 2011 年に宮崎さんが理事長に就任し、2018 年度までの間に、現在の JARA の作品展スタイルが確立されたと思います。例えば、3 都市における会場も定着しましたし、映像作品の上映をするようになったのも 2012 年からです。図録広報誌が A4 サイズの今のデザインになり、コラムのようなページを設けるようになりました。図録を外注でなく会員が作成し始めたのもこの時ですね。

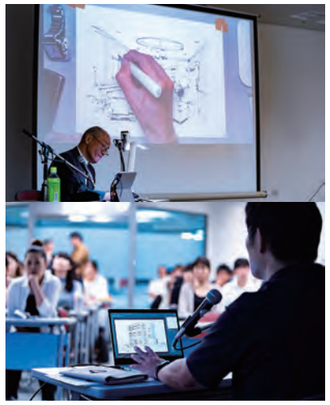
宮崎： もちろん昔から図録や広報誌、会報誌などいろいろあって、白黒だったけど内容は豊富だったよ。カラーになった頃の図録は絵が小さかったので、今の A4 サイズに戻って作品が大きく掲載できるようになったのは良かったと思う。

上野： また、作品展期間中のギャラリートークやセミナーも定着しました。東京展ではこの数年、異分野の講師を迎えたギャラリートークやセミナーを催しています。大阪展では実演セミナーも行われ、学校などで教える仕事をしている会員の多さを感じます。地域の特徴があるのは面白いですね。
その他にも、JARA café / JARA barといった、オンデマンド配信サイトも作りましたね。せっかくの活動をそれまでは記録、公開していなかったんですが、自分達で録画から編集、アップまでできるようになりましたので。すべて会員達の発案で会員達の手でやってきましたが、よく仕事をしながら毎年こんなことできましたよね。

ギャラリートーク風景

2011 年 国際建築イラストレーション展 VAD

図録広報誌



実演セミナー

JARAcafe / JARAbar
本誌 P61 詳細ご覧ください。

40th Anniversary Special Dialogue

TakehikoMiyazaki ＊ UenoMari

やる気のある会員の発案を否定しない気風が良かったのだと思います。

宮崎： そして 2013 年からは作品展において、会員の作品展示だけでなく『特別展示』『特別企画』と言うコーナーを設けました。その年々に注目された施設のヴィジュアライゼーションや広報誌と連動した企画展示をしました。一味違った展示が作品展に花を添えた…かな？

上野： 特別企画は、「建築の表現」が印象に残っています。浅古さんが建築家を訪ね、その方の描いたドローイングについてインタビューしてパネル展示したんです。そのほかに「にぎわいの表現」「建築写真の表現」などは、山﨑さんのアイディアと会外の方のご協力なくしてはできなかったことです。特別展示では、「新国立競技場」を2回やりましたね。コンペやり直しの前後で。じゃあオリンピック関連の施設のパースを集めて展示しては？！なんて案もあって、実現しませんでしたけど企画って楽しいんですよね。

宮崎： 2015 年には『VAV』（Variation of Architectural Visualization 建築表現のバリエーション）という勉強会を実施しました。1年目のテーマは同一の題材（建築）を会員有志がそれぞれの感性で表現しプレゼン。2 年目は『ガラス表現』をテーマに…。私はこのような企画、実は大変大事なことだと思ってまして、JARA に在籍するにおいて作品展に出品する以上に意味があることだと思っています。活動に余裕があれば、是非これからもいろんなテーマを企画して続けていって欲しいものです。表現する作業の中でテーマなどいくらでもある筈ですからね。上野さんは如何思われます？

VAV「ガラス表現」

上野： 同感です。こと表現においては、自分でやってみるとか、人と比べてみるとか、助言を受けるとかの深堀りがプロフェッショナル性を高めるキーになると思います。特に昨今、新しい情報が日々 WEB 配信されており、大変知見を得やすくて素晴らしい時代だと思いますが、成長のためにはインプットだけではなく、アウトプットをすべきという話があります。WEB でアウトプットをすることは容易にできますが、そこに一つ JARA の展覧会も、リアルアウトプットの場として活用してもらいたいものです。否応なしに比較できる環境と、独特な客観性があります。自ずと人の交流が生まれ、クライアントや同業など、いろんな人の価値観にはっとさせられます。今でも覚えているのは「値段が書いてないとどう評価してよいかわかんないよ」と設計者に言われたことです（笑）。また、作品展も勉強会も「褒めあい」の場になってはつまらないですよね？そこは職能団体としての企画であればこそ気を付けたいところです。「せっかく出したのに誰にも何も言われなかった」というようなことも一つの結果で、「印象が薄いのかな」という反省にもなるものです。

宮崎： そう、「勉強会」だけでなく会内では出品作品に対して会員によるコメントの出し合いしてますよね。あれは良いことだと思います。私なんぞはちょっときついコメントもしてますから、嫌がられているかもしれませんが…（笑）。でも、あとで会った時に「考えてもいなかったこと言って下さり…」などと言われると、「あぁ、良かった」と思います。

「これから」について

上野： こうやって振り返ると、JARA はこの 10 年でもいろいろチャレンジしてきましたね。昨年は新型コロナウイルスで作品展を中止したので、私は理事になって以来初めて、JARA の宿題に追われない半年を体験しました。他の会員もそうだったと思いますが、ひと呼吸おいて、これからのことを考える機会になったのではないでしょうか…。今後については、時代と JARA らしさの両方を意識していきたいと思います。どちらも個人それぞれ感じ方が違うものですが、この40年のまとめを節目として、新しい一歩を踏み出さねばと思います。建築のヴィジュアライゼーションというのは、どこからどこまでが業界と言えるのかわからないくらい幅が広がっていますが、「建築の表現に携わる人」の数だけ、成長したいという気持ちが存在します。もちろん作品展も良いのですが、活動の形にとらわれなくても良いと思います。毎回「第一回 xxxx」でもいいじゃないですか（笑）。

宮崎： はい、そう思います。私は常々思っていることで、どんな職能でも言えることですが、人間使うツールが変わると思考や哲学も変化するものです。実際若い会員と話していても、私のような年寄りには理解することが難しいことがけっこうあります。もちろん頭を柔く持って行こうと思いますが、ある程度仕方がないと思うこともあります。ところで手描きのレンダラーはパースを「描く」と言いますが、CG では「作る」と言うようになりましたね。

上野： そうですね。他にも変化をたくさん感じます。設計者がパースを依頼す

インタビュー企画「建築の表現」

特別展示コーナー

作品交流

VR 体験イベント

40th Anniversary Special Dialogue

TakehikoMiyazaki ＊ UenoMari

る時のメイン手段が「打ち合わせ」から「指示書」になったと思います。また、指示書自体が具体的でわかりやすくなってきたと感じませんか？おそらくあらゆる分野で海外の人材活用が定着し、曖昧な指示が減ったのだと思います。さらに重大な変化としてはBIMの定着でしょうか。設計の過程である程度のパースができてしまうようになったので、パース制作だけの仕事は減ってきているのが現実です。我々は理解力と提案力を磨くなどして、表現のプロとして認知されなければ、次の展開が望めないと思います。

ギャラリートーク

宮崎：　理解力と提案力を磨くと言うことが重要なことはまったく同感です。長年に渡ってJARAでは問われてきたことですよね。ただ「指示書」によって分かり易くなったについては疑問もあります。なかなかここでの短い文章で表現するのは難しいのですが、次から次へと来る「指示書」に振り回されることも良くある訳でして、自分の中での最終的な絵のまとめをする時間がとれないって言うことありませんか？私は近年そんなことが増えましたね。やはり顔を合わせての「打ち合わせ」が大事だと思っています。「指示」だけでは限られた時間内での事項のプライオリティを掴もうにも難しいし、話すことでコミュニケーション不足による行違いも減らせます。指示の網羅にだけに血道を上げる制作者では在りたくないってありますね。

上野：　打ち合わせはオンラインが多くなりましたが、オンラインの良さ、対面の良さそれぞれあることがこの一年でわかりました。ということは、変化というのは選択肢の増加と言えるかもしれませんね。建築の表現をするメディアの進化や多様化はもっと進みますので、使う側のスキルや仕事の仕方や立場がもっとバラバラになっていくと思います。JARA創立時の会員はほとんどが同じ守備範囲だったと思いますが、守備範囲が違う人が多くなり、会話の内容も変化するでしょうね。そもそもJARAは創立当初からパース協会という名称ではなく、〝レンダラーズ〟つまり表現する人達のアソシエーションだと言ってますので、建築を表現する手段が広がったなら、会員の幅が広がるのは当然のことです。そこで切磋琢磨すべきは何か、時代に応じて考えれば良いと思います。一方、「パース展」という言葉には愛着がありますし、なによりパースには表現の基本が詰まっているということを忘れたくはないですね。

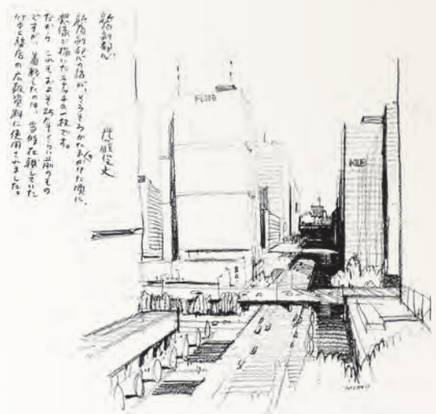
作品展集合写真

宮崎：　パースペクティヴは日本語で「透視図法」「遠近法」と訳されます。建築の視覚化表現がパースでなければならないなどと言うことはありませんが、多くの場合は「透視図」が基本にあることは間違いありません。動画であれ静止画であれ、どんなソフトを使ったCGであれ……です。その基本概念を知ることは大事で、その上で表現として概念を逸脱したものを作り上げることは有りですよね。その方がわかり易かったり、面白味もあったりするのは良くあることですし。とは言え、上野さんおっしゃる通り携わる職能者の幅は広がるでしょう。その中でディスカッション・コミュニケーションが盛んになる会であれば良いと思います。
残念ながら昨年からの新型コロナウイルスの影響で会員間、あるいは会員外でも同業者の方々とのコミュニケーションが激減してしまいましたけどね。そしてこのことが時代の変革を加速させる契機となる可能性充分です。そんな中でも「表現」→「伝える」、あるいは「伝えるための表現」でもイイのですが、その根底にはどんな思考・手法が必要なのか？は、日々話合い、探り合っていくことは大切だと考えます。JARAのような様々な職場からの集まりの存在意義はそこにも有りと思います。

上野：　いわゆるZ世代はもうこの業界ではキラキラと輝いているんですよね。今回のJARA 40年のあゆみは、彼らにどう受け止められるんでしょう。「周年なのに公募展やらないの？」って思われるんでしょうか（笑）。このように過去を振り返り言葉に残すことができたことは、私達の業界にとっては必要なことだったと思います。未来に活かしていただきたいです。次世代が、新しい建築ヴィジュアライゼーションの世界をどう切り開いていくのか、楽しみですね。

支部会

プチ勉強会



光藤俊夫画「新宿副都心スケッチ」

JAPAN ARCHITECTURAL RENDERERS ASSOCIATION

日本アーキテクチュラル・レンダラーズ協会（JARA）の発足時より会長職を務めていただきました光藤俊夫氏は2017年12月4日に他界されました。

長きにわたりJARAを見守ってくださいました会長に、心より感謝申し上げます。

JARA2018広報誌に掲載の「光藤俊夫会長を偲んで」PDFページはこちらより→

1990

JARA会員アンケート

2020

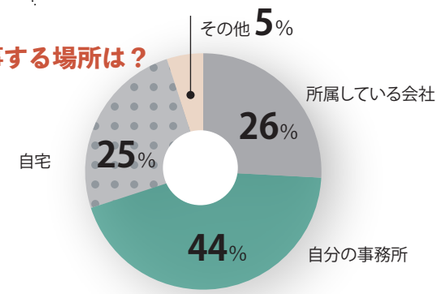
今どきのレンダラー

1990年の会員と2020年の会員は、30年という時の流れの中でどのように変化しているのか？　比較した結果、働き方が変化し、できる限りパースの仕事を続ける為に技術を磨くレンダラーの姿が見えた気がしました。
1990年のアンケート結果は右のQRコードで見ることができますので、30年前のレンダラーにタイムスリップしてみてください。

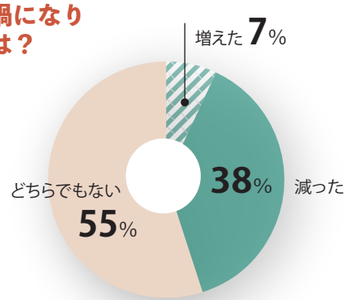
CHECK!

働く環境

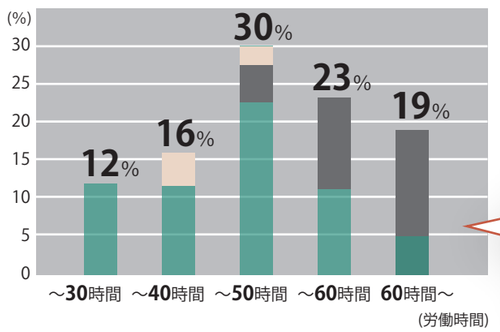
仕事する場所は？



コロナ禍になり仕事量は？

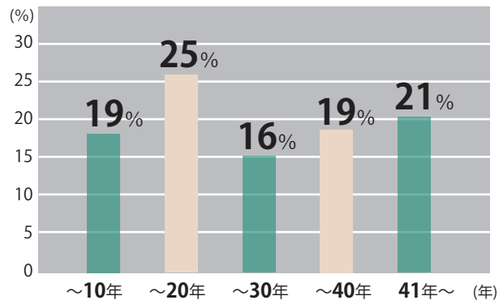


一週間の平均労働時間は？



レンダラー・ヴィジュアライザーとして

職能歴は？

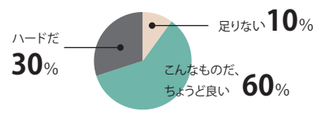


現在の業務範囲は？ <複数回答可>

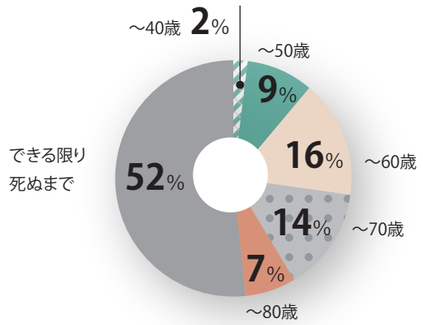
CGパース	35 %
手描きパース	20 %
ムービー	13 %
設計	13 %
BIM	6 %
シミュレーション	4 %
xR	4 %
その他	5 %

その他の業務の内訳
絵画教室
グラフィックデザイン
トレーニング
プロダクトCG作成
プレゼン資料の作成
非常勤講師

その労働時間をどう感じてる？



何歳までパースを続けますか？



パースを描く上で大切なことは?

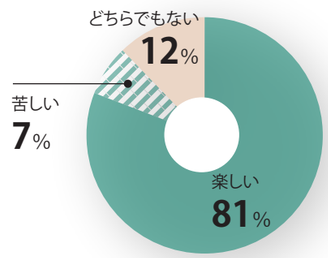
●1990年のアンケート結果と似ている意見

- 設計コンセプトを理解する
- 表現力
- 根性/意地・しつこさ・やる気
- コミュニケーション
- 誠実さ
- 自分の個性・表現
- 感性を磨くこと

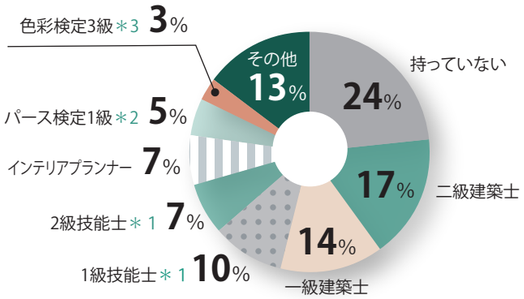
●1990年のアンケート結果と少し違った意見

- 相手の気持ちになって描く
- 想像力と知識
- 自然体でいる
- 興味・浅く広い知識・好奇心
- 描画修行と設計図をより深く理解する
- 見立てる力・技術力
- 空気を描く
- 魅力を伝える
- 相手の話を聞くこと
- 観察力・想像力
- 発注者の希望と予算を満たすこと
- 手書きスケッチが基本

この職能はなんだかんだいっても…



建築やパース・CGに関する資格を持っていますか？ <複数回答可>

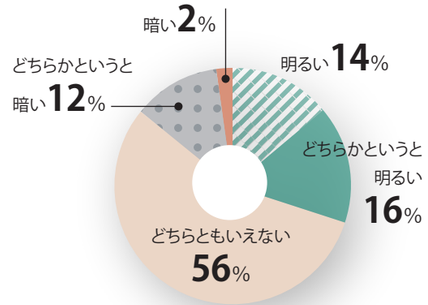


その他の資格の内訳……13%

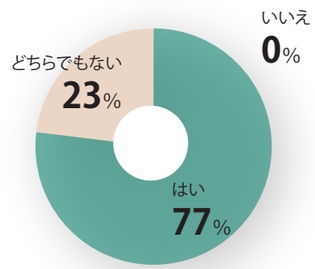
色彩検定2級＊3/宅地建物取引責任者/カラーコーディネーター3級＊4/美容師/PCインストラクター2級/CAD利用技術2級/コンピュータ教振協会建築3Dデザイナー 上級/応急危険度判定士/兵庫県ヘリテージマネージャー/積算士

＊1 厚生労働省実施国家検定
＊2 パーステック協会主催
＊3 色彩検定協会主催文部科学省後援
＊4 日本商工会議所主催

パース（ヴィジュアライゼーション）の未来は…?



日本アーキテクト・レンダラーズ協会（JARA）に入ってよかったですか？



こんなイベント
やりました

JARA2019_東京展

ギャラリートーク_A 「建築写真の表現」

建築写真家　小川 泰祐氏（日本建築写真家協会 会長）

建築レンダラー・司会　山﨑 信宏氏（大成建設株式会社）

左:山﨑 信宏氏　右:小川 泰祐氏

実在する建築を被写体に、そのデザインや空間の魅力を写真としてとらえる建築写真家と、未だ見ぬ建築を魅力的に描く建築レンダラー。
表現者として建築と対峙する両者の違いと共通点に迫る。

建築を被写体とする共通点を持つ建築写真家と建築レンダラーによる、これまでありそうでなかった組み合わせのトークセッションでした。建築写真は、やり直しのきかない一発勝負の世界。空間の魅力を最大限引き出すフレーミング力と、時に光をも味方にする表現者としての辛抱強さは、まるで建築を通して建築家と対話しているようでもありました。ファインダー越しに本物の建築とリアルに対峙するその姿勢に、会場の多くのレンダラーは刺激を受けたことと思います。

小川 泰祐氏

こんなイベント
やりました

JARA2019_東京展

ギャラリートーク_B 「空間体感の表現」

VRプラットフォーム運営　山口 征浩氏（Psychic VR Lab代表）

建築レンダラー・司会　山﨑 信宏氏（大成建設株式会社）

中央:山口 征浩氏

現実世界と仮想世界を融合させて「多様な新しい体験」を提供するxR。
それらの表現を可能にする最新テクノロジーが、建築の表現にもたらすものは何か。空間の視覚化の拡張は、表現の進化となるのか。
“体感の表現”を通して空間ビジュアライズの本質に迫る。

仮想空間の体験に必要なVRゴーグルやスマートグラスの持つ可能性に早くから着目し、すでに様々なヴァーチャル体験を多くの人々に配信してきた山口氏。最先端のVRテクノロジーを人間の能力拡張ととらえる氏が繰り出すコンテンツは、斬新にして正に“魔法”のような誰も経験したことのない空間体験を人々にもたらす。xR技術は、今後様々な分野に影響を与える技術であり、建築ヴィジュアライゼーションの世界にも、視覚だけに頼らない新たな「体感の表現」をもたらしてくれるのではないだろうか。

こんなイベント
やりました

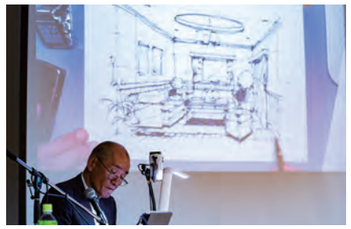
JARA2019_大阪展

実演セミナー 「活躍するパース」

宮後 浩氏（コラムデザインスクール学長）

長谷川 繋幸氏（シフト・ワン代表）

根来 祐史氏（NEGOROレンダリング代表）



宮後 浩氏

長谷川 繋幸氏

「構想・企画」~「設計~施工」~「販売・広報」
それぞれの段階で、必要とされるパースその実績と現場の活用法を、
実演を見せながら解説！

パースはパースでもフェーズにより、表現の仕方やとらえ方が変わってきます。
現役・ベテランのレンダラーが実例とともに、各フェーズでの表現、「活躍するパース」について語りました。デモンストレーションも行いました。「販売～広報」の段階でのパース活用について、実際に使用した分譲住宅販売の広告用パースを紹介し、見せ方のポイント等を解説。そして作成実演として「今からすぐ顧客に持って行く！」って設定で、ラフ図面～内装　外装パース&平面立面図の作成を10分で完了する作業をお見せ致しました。（根来氏）

根来 祐史氏

こんなイベント
やりました

JARA2019_特設コーナー

「VR体験コーナー」

建築と空間アート（Psychic VR Lab）

フィリップジョンソンのThe Glass House（vicc）

史跡の予想復元CGをVRで体験（ワイクウーデザイン）

空間は「見る」から「体験する」時代に

エンタメ系VRから、史跡建築・有名建築のVRコンテンツ、これらを体感できるコーナーを計画し、来場者の皆さまに体験していただきました。

JARA cafe menu
セミナーやイベントの録画配信。

「JARA cafe（セミナーやイベントの録画配信）／017～021」よりご覧ください。
録画編集したものを JARA の WEB サイトにて一部公開しております。

「JARA bar（時に熱く、時にゆるく、時に酒を酌み交わしながら、語る）／第八夜」よりご覧ください。
録画編集したものを JARA の WEB サイトにて一部公開しております。

JARA bar menu
時に熱く、時にゆるく、
時に酒を酌み交わしながら、語る。

WEBもたまに充実__例えばコレ。

JARA 公式ホームページ

http : // www.jara-net.com

about JARA

2021 年度 JARA 組織

理事会

理事長	上野真理
事務局長	山田淳一郎
本部会計・関東支部会計	長谷川繁幸
本部広報・関東支部広報	小西恵一
作品展担当	山﨑信宏
関東支部長	渡辺健児
中部支部長・広報	村瀬正彦
中部支部会計	後藤亮
関西支部長	湯浅禎也
関西支部会計	西口浩英
関西支部広報	西川修
監事（2021 年度）	笠井聡美・藤元宗久
理事外アドバイザー	宮崎岳彦
海外交流委員	渡辺健児・松谷一樹
選挙管理委員	高井洋・舟越美紗

広報委員会

広報委員長	小西恵一
WEB 委員	西川哲矢
図録広報誌編集委員	應家晶
デザイン印刷担当	應家晶
作品展リリース担当	西口浩英

作品展実行委員会

作品展実行委員長	山﨑信宏
副委員長	湯浅禎也
アドバイザー	宮崎岳彦
事務局 / 協賛担当	山田淳一郎
会計	長谷川繁幸
コーナー担当	宮崎岳彦・湯浅禎也・長谷川繁幸・有澤雄介・渡辺健児・山田淳一郎・松谷一樹・小西恵一
その他担当	中村泰剛・上野真理・山﨑信宏
東京展実行委員長	山﨑信宏
東京展他委員	雨宮正明・松谷一樹・長谷川繁幸・西川哲矢・尾箸恵美・浅古陽介
名古屋展実行委員長	村瀬正彦
名古屋展他委員	後藤亮
大阪展実行委員長	湯浅禎也
大阪展他委員	西川修・西口浩英・根来祐史・広畑直子・安井秀一・中村泰剛

編集後記

歴代の理事長のみなさまにご協力いただいた特集ページや会員アンケートなど楽しめる誌面になりました。先人達は、本業の業務をしながら広報誌づくりをされていたのかと尊敬の念を抱きつつ、４０年という歴史を感じながらの編集作業でした。たくさんの方のご協力ありがとうございました。　（オウイエデザイン株式会社 應家晶・洋子）

入会案内

■ 正会員資格

業務または業務の一部で「建築および空間の視覚化」を職能としている個人（会社員、フリーランス問わず）とし、制作ディレクション業務も含みます。正会員は本会の主構成員として事業や活動に参加し、役員の選挙権と被選挙権を有します。入会に際しては作品 5 点の提出をいただき理事会の承認を要します。

※「建築および空間の視覚化」とは、建築・インテリア・ランドスケープなど、それらの空間もしくは環境をパース・動画を含む様々な手法を用いて視覚化することをさします。

JARA では随時会員を募集しております。JARA 会員はパースペクティブの概念を元に建築・土木・環境空間を描き表現する職能者で構成され、個人では為し得ない社会活動、情報交換活動を促進するため全国の会員で組織し、事業を展開しております。CG 制作者、手描き制作者、それらをディレクションする方など、本職能の発展に積極的な方の参加をお待ち申し上げます。

■ 入会申込みは JARA の WEB サイトから

http : // www.jara-net.com

PERSPECTIVE

JARA広報誌　パースペクティブ

編集・発行

日本アーキテクチュラル・レンダラーズ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋2-7-3 柄澤ビル4F

TEL：03-5956-5029　FAX：03-5956-5038

http://www.jara-net.com